## WEB+DBシステム(応用編)

### 第4回(2016年10月13日)

### ログイン認証・ユーザ管理



### □ 前期の復習も含めて、ログインユーザの管理を組み 込む。



サイトの性質を考える。

どんな役割の人が使用するか。 ※ 管理人:管理人もWEBからデータを操作できる ※ スタッフ:サイト運営側ユーザ:商品データのメン テナンスや、商品の発送処理などを行う。 ※ ゲスト:そのサイトを通じて情報を得たり、購入し てくれる人。

システムからは、全てをユーザとして扱う。

## ショッピングサイトの機能

サイトで何が出来るか。
サイトを運営する側の立場から・・・
▶ 商品を登録する。
▶ 顧客リストを確認する。
▶ 顧客の購入品リストを見る。
▶ 購入済みの商品を発送する。
▶ などなど

## ショッピングサイトの機能

顧客の立場から、どんなことが出来て欲しいか。

- ▶ 商品の写真や価格などを画面で見る。
   ▶ 名称で商品を検索する。
- ▶ 自分を登録する。
- ▶ 商品を選択して、カートに入れる。

### ▶ などなど

## ショッピングサイトのテーブル設計

### マスターテーブル - 比較的持続的に内容が変わらないもの

- ♦ Merchandises 商品
- ♦ Staffs ログイン認証用
- ♦ Customers ユーザ認証用
- Activityの記録(Transaction) 販売記録
  - ♦ Sales records 購入(販売)管理
  - ◇ Shopping Carts 購入用/販売プロモーション用

Log - システムの稼働記録

◇ Access Log – log in/outの記録,

などなど

## 今日の導入

サイトのWelcome画面を作る。
 ここから、スタッフ用のログイン画面などに分岐させる。
 サイトのお勧め商品や、お知らせなどを表示する。

2. システムのTOP画面に、認証要求を設定することにより、自動的にログイン画面が開かれることを確認する。

3. ログインしなくても商品を「ショッピング・カート」に入れられる ようにし、「支払い」の段階で「会員登録=sing up」させる。

準備(Deviseの確認)

### 必要なgemがインストールされているか確認します。

gem list devise と入力します。もし、Installされていなかったなら、 Gemfile gem 'devise' gem 'bcrypt', '~>3.1.11' を追加し、 sudo bundle install コマンドを実行します。



### Gemfileは、プロジェクトフォルダの直下にあります。

		$\nabla$	5	# Use squites as the database for Active Record
			6	gem 'sqlite3'
👂 📂 bin		^	7	# Use Puma as the app server
👂 🗁 config			8	gem 'puma', '~> 3.0'
👂 👝 db			9	# Use SCSS for stylesheets
			10	gem 'sass-rails', '~> 5.0'
011 🥘 V			11	# Use Uglifier as compressor for JavaScript assets
👂 🗁 log			12	gem 'uglifier', '>= 1.3.0'
👂 🗁 public			13	# Use CoffeeScript for .coffee assets and views
👂 🗁 test			14	<pre>gem 'coffee-rails', '~&gt; 4.2'</pre>
N 👝 tmn			15	<pre># See https://github.com/rails/execjs#readme for more supported runtimes</pre>
v 🖉 unp		_	16	gem 'therubyracer', platforms: :ruby
👂 🗁 vendor		=	17	
💽 confia.ru			18	gem 'devise'
📀 Gemfile			19	gem 'bcrypt', '~>3.1.11'
📄 Gemfile.	lock		20	
- Bakefile			21	# Use jquery as the JavaScript library
			22	gem 'jquery-rails'
★ README	.md	$\sim$	23	# Turbolinks makes navigating your web application faster. Read more: htt
<iii< td=""><td></td><td>&gt;</td><td></td><td></td></iii<>		>		

## sudo **E**

bundle install

ではなく、

sudo bundle install

を実行する理由

Suは、Super User(つまりroot/システム管理者)で

Doは実行、システム管理者モードで実行しろ、という 命令です。Bcryptが「暗号処理」を含むため、一部 su権限を要求している(らしい)ので、bcryptの installがsudoでないと失敗するため、です。

## Bundle installの実行

### Bundle installは、console上で、プロジェクトフォルダに移 動して実行します。

### 私の場合は、vegetable-marketフォルダです。各自、自分 が決めたプロジェクトのフォルダで行って下さい。

[WebDB@cisnote vegetable-market]\$ sudo bundle install Don't run Bundler as root. Bundler can ask for sudo if it is needed, and installing your bundle as root will break this application for all non-root users on this machine. Fetching gem metadata from https://rubygems.org/ Fetching version metadata from https://rubygems.org/ Fetching dependency metadata from https://rubygems.org/ Resolving dependencies.... Using rake 11.3.0 Using concurrent-ruby 1.0.2 Using i18n 0.7.0 Using minitest 5.9.1 Using web-console 3.3.1 Using rails 5.0.0.1 Using sass-rails 5.0.6 Installing devise 4.2.0 Bundle complete! 17 Gemfile dependencies, 71 gems now installed. Use `bundle show [gemname]` to see where a bundled gem is installed. [WebDB@cisnote vegetable-market]\$



Gitのデータベースに、今の時点のファイルをバックアップして おき、問題が起きた時に戻せるようにしておきます。(第2回 の資料参照)

わからない場合は、スキップしても構いません。

gitで、checkoutして元に戻した時は、
 rake db:migrate:status
の入力で、状況を確認し、何回rollbackすれば良いか考え、
 rake db:rollback
を必要な回数行い、データベースの復元も行って下さい。

## Gitの初期化と最初の保存

git init git add . git commit -m '初期状態' で、最初の状態を保存できます。

特に、新しくバックアップする対象が増えていない場合 は

git commit -a -m '保存内容のメモ' で保存できます。

## Gitによるバックアップの作成

### 第2回スライド参照

[root@cisnote ecocar]# git init Initialized empty Git repository in /home/rails3work/ecocar/.git/ [root@cisnote ecocar]# git var GIT\_COMMITTER\_IDENT Ikuo Kobayashi <ikuo.kobayashi.t9@k.hosei.ac.jp> 1350446699 +0900 [root@cisnote ecocar]# git add . [root@cisnote ecocar]# git commit -m '初期状態' [master (root-commit) df3fcbc] 初期状態 71 files changed, 2342 insertions(+) create mode 100644 .gitignore create mode 100644 .project create mode 100644 Gemfile

## Gitの小まとめ(第2回再掲)

gitの初期化 (使い始め)

git init [プロジェクトのルートで行う。]

コミッタの登録 (一度だけ、または、システムで一度)

git config --global user.name "私の名前"

git config --global user.email xxx@xxx.xx

保存対象の追加

git add フォルダ名(またはファイル名)

これまでの保存対象の更新を追加

git add -u

保存(コミット)

git commit -m "バックアップの名称"

## Git (の課題)についての補足

バージョンが分岐したり、「改行」や「空白」で段落などの見た目を調えてしまったりした場合、意図せずに「競合する改修」を加えたことになる場合があります。

こうした場合は、編集しないでgitの操作だけではバー ジョンのmergeや、「過去の消去」などを行うことが 困難になる、となってしまい、「レポート課題」で指定 した「gitの操作だけで」</u>行うのは無理、ということに なってしまいます。<u>→編集作業は避けて通れない、</u> という前提で課題を提出して下さい。

ファイルの探し方

### Railsで作成されたファイルは、大きく

app model/view/controllerなど アプリケーションプログラムが存在

config 言語環境などの設定ファイル

db sqlite3のデータベースファイル

doc 開発中アプリのAPIドキュメント用

などのフォルダがあり、「設定」ならconfig, プログラムならapp の中を探して下さい。

※ APIとは、Application Programming Interfaceの略で す。

ファイルの探し方(2)

第1回の授業スライドを参照して下さい。

Aptanaを起動した際に表示されるWorkspaceの場 所にファイルはあります。

/home/WebDB/workspace/

などという名称で作成され、この下に「プロジェクト」単 位でフォルダが作成されます。

それぞれのプロジェクトをルートとすると、一つ前のページのフォルダが置かれています。

## Project ^ Devise 1 > A - N

### 次に、プロジェクトにdeviseをインストールします。 rails generate devise:install

と入力します。

[WebDB@cisnote vegetable-market]\$ rails generate devise:install Running via Spring preloader in process 3691 create config/initializers/devise.rb create config/locales/devise.en.vml \_\_\_\_\_ Some setup you must do manually if you haven't yet: 1. Ensure you have defined default url options in your environments files. Her is an example of default url options appropriate for a development environm ent in config/environments/development.rb: config.action mailer.default url options = { host: 'localhost', port: 300 0 } In production, :host should be set to the actual host of your application. 2. Ensure you have defined root url to \*something\* in your config/routes.rb. For example: root to: "home#index" Ensure you have flash messages in app/views/layouts/application.html.erb. For example: <%= notice %> <%= alert %> 4. You can copy Devise views (for customization) to your app by running: rails g devise:views [WebDB@cisnote vegetable-market]\$



create config/initializers/devise.rb create config/locales/devise.en.yml

======

Some setup you must do manually if you haven't yet:

1. Ensure you have defined default url options in your environments files. Here is an example of default\_url\_options appropriate for a development environment in config/environments/development.rb:

config.action\_mailer.default\_url\_options = { host: 'localhost', port: 3000 }

In production, :host should be set to the actual host of your application.

2. Ensure you have defined root\_url to \*something\* in your config/routes.rb. For example:

root to: "home#index"

- 3. Ensure you have flash messages in app/views/layouts/application.html.erb. For example:
  - <%= notice %> <%= alert %>
- 4. You can copy Devise views (for customization) to your app by running:

rails g devise:views





\_\_\_\_\_\_

### views/layouts/application.html.erb

Deviseのメッセージにあった2行 <%= notice %> <%= alert %> を<%= yeild %>の前に書き加えます。



### Welcome画面の生成(前期教材参照)

### 以下のコマンドを入力します。

### rails generate controller welcome index

[WebDB@cisnote vegetable-market]\$ rails generate controller welcome index Running via Spring preloader in process 4165 create app/controllers/welcome controller.rb route get 'welcome/index' invoke erb create app/views/welcome create app/views/welcome/index.html.erb invoke test unit test/controllers/welcome\_controller\_test.rb create invoke helper create app/helpers/welcome\_helper.rb invoke test unit invoke assets invoke coffee app/assets/javascripts/welcome.coffee create SCSS app/assets/stylesheets/welcome.scss create [WebDB@cisnote vegetable-market]\$

#### Welcome 画面の登録

作成したWelcomeのindex画面を登録します。 config/routes.rbを編集します。 root to: 'welcome#index' を一行追加。

E 🔄 🕞	~	1⊖ Rails.application.routes.draw do
bin	^	2 get 'welcome/index'
🗢 🗁 config		4 resources :merchandises
environments		5 # For details on the DSL available within this file, see http://guides.rubyonrails.or
👂 🗁 initializers		
👂 🗁 locales		7 root to: "welcome#index"
💽 application.rb		9 end
💽 boot.rb		
ঝ cable.yml	_	
🎑 database.yml	=	
💽 environment.rb		
puma.rb		
routes.rb		
🔛 secrets.yml		
- anning th		

## 「ユーザ」の設計(再掲)

サイトの性質を考える。

どんな役割の人が使用するか。

- ※ 管理人:管理人もWEBからデータを操作できる
- ※ スタッフ:サイト運営側ユーザ:商品データの メンテナンスや、商品の発送処理などを行う。
- ※ ゲスト:そのサイトを通じて情報を得たり、購入してくれる人。

システムからは、全てをユーザとして扱う。

## ユーザモデルの設定

権限がなく、ただ閲覧するだけの「ゲスト」は、ここでは「ユーザ」のテーブルには登録しない。

「買い物」などを管理する場合(何らかのアクセス記録 をシステムに残す場合)には、「一般ゲスト」として登 録する。(ログイン認証の対象とする。)

同じ画面で操作させるため、

1:管理人、2:スタッフ、3:ゲスト などの role(役割)コードをユーザモデルに与える。

マスタとは何か

「役割」 role などは、必要に応じて拡張される場合 があります。

このため、こうした項目も「一般データ」などと同様に、 システムに「マスタ」として登録します。

今回の「ユーザ」は、この考え方でいけば「マスタ」としてシステムに持たせるべき情報になります。

今回は、「マスタ」と「トランザクション」は分離しないものとして作って行きます。が、スライド中に「マスタ」という言葉を使うことがあるので、以下に解説します。

## トランザクションとマスタ

- データベースに記録される情報を、2種類に分けて考える場合 があります。
- (1) 日常的にアクセスがあって、更新される情報
  - ・ メッセージの書き込み ・ 商品の注文
  - ・ 投票 ・ 売上 ・ テストの成績など
- (2) 更新頻度が低く、一旦決めておくと数年間変更がなかった りする情報
  - 商品名や価格 ユーザ情報 支店情報
  - ・ 分類コード

※ スーパーマーケットの野菜の価格などは、「マスタ」としては 扱わない性質になります。

マスタ・メンテナンス

頻繁にアクセスされる項目は、それ専用の画面を用意 し、TOP画面などから簡単にリンクを辿れるようにし ます。

たまにしか更新されないマスタデータ群は、「マスタ・メ ンテナンス」というメニューを用意して、そちらからア クセスするように、「トランザクション」管理と分離す るのが、一般的な業務アプリケーションの作り方に なります。

Scaffoldされる画面が概ね該当します。

### vegetable-market」でのuser

システム全体の管理者としてadminを設定します。

- ー部のマスタは、admin権限でのみ操作できるようにします。 購入を管理するスタッフだけが、商品データを登録できるように します。会計記録などは、admin(システム管理者)や顧客 には見られないようにしたい。
- 一般ユーザは、「商品購入」ができるようにします。

(商品閲覧画面は、ログインしなくてもできるように作りますの で、roleのインストールができていなくても、作れるようにしま す。)

## Roleマスタの導入

- ユーザ(User)テーブルはログイン認証用として作成されます。
- ここで、ユーザテーブルに、role\_idを追加し、ログイン 認証の対象となるユーザに、「役割」を追加します。

1: 管理人、 2: スタッフ、 3:ゲスト などの role(役割)コードをユーザモデルに与えます。 昨年度までは、role\_idでユーザを切り分けていまし たが、今年度はenameを使うこととします。



Scaffoldingによって、roleテーブル(マスタ)を生成します。

識別子としても使うename(English name)と、表示 のわかりやすさのためのjname(Japanese name)の両方を持たせます。

rails generate scaffold role ename:string jname:string

```
[WebDB@cisnote vegetable-market]$ rails generate scaffold role ename:string jnam
e:string
Running via Spring preloader in process 4246
      invoke active record
               db/migrate/20161012091851_create_roles.rb
      create
              app/models/role.rb
      create
      invoke test_unit
     create test/models/role test.rb
                 test/fixtures/roles.yml
      create
      invoke resource_route
               resources : roles
      route
      invoke scaffold controller
               app/controllers/roles_controller.rb
      create
               erb
                 app/views/roles
      create
                 app/views/roles/index.html.erb
      create
                 app/views/roles/edit.html.erb
      create
                 app/views/roles/show.html.erb
      create
      create
                 app/views/roles/new.html.erb
                 app/views/roles/ form.html.erb
      create
               test unit
                 test/controllers/roles_controller_test.rb
      create
               helper
                 app/helpers/roles_helper.rb
      create
               test_unit
              ibuilder
                 app/views/roles/index.json.jbuilder
      create
                 app/views/roles/show.json.jbuilder
      create
                 app/views/roles/_role.json.jbuilder
      create
      invoke assets
               coffee
                 app/assets/javascripts/roles.coffee
      create
               SCSS
                 app/assets/stylesheets/roles.scss
      create
      invoke scss
               app/assets/stylesheets/scaffolds.scss
  identical
[WebDB@cisnote vegetable-market]$
```

Migrationの実行

### rolesテーブルを作成しておきます。

### rake db:migrate



rails s -b 127.0.0.1

で、サーバを起動し、役割マスタデータを登録します。

http://127.0.0.1:3000/roles

から、rolesを新規登録し、

ename:admin jname:管理人 ename:staff jname:スタッフ ename:guest jname:一般客 の三種類を登録します。

0	
VegetableMarket	× &
€ i   127.0.0.1:3000/r	roles

#### Roles

Ename	Jname				
admin	管理人	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	Destroy	
staff	スタッフ	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	<u>Destroy</u>	
guest	一般客	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	Destroy	

New Role

## Role表示にIDを追加

### app/views/roles/index.html.erb に、idの桁を追加します。 これは、データベースのデフォルトを設定するためです。



## ID表示のあるrolesのindex画面

# IDの表示が追加されると、以下のような画面になります。



### Roles

id	Ename	Jname			
1	admin	管理人	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	<u>Destroy</u>
2	staff	スタッフ	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	Destroy
3	guest	一般客	<u>Show</u>	<u>Edit</u>	Destroy

#### New Role

## こから先の手順に注意!

### こんな話が・・・

>>Railsは色々ジェネレータでコードを生成してくれて すごいなあと思うけど、始発で乗り損なったり、乗る 電車や順番を間違えると結構戻るのが大変というか、 結局てくてく隣駅まで歩くという、そんな感じが意外 に多いような気がする。

http://d.hatena.ne.jp/yarb/20100803/p1

Userテーブルにhandleなどを登録するために、先に userをscaffoldし、次にdevise生成します。

## ログインユーザモデルの生成

### ログインするユーザとして、ユーザクラスを生成します。

# rails generate scaffold user email:string role\_id:integer handle:string

[WebDB@cisnote _id:integer ha	e vegetable-market]\$ rails generate scaffold user email:string r andle:string	ole
Running via Sp	pring preloader in process 4441	
	active_record	
create	db/migrate/20161012094205_create_users.rb	
create	app/models/user.rb	
	test_unit	
create	test/models/user_test.rb	
create	test/fixtures/users.yml	
	resource_route	
route	resources :users	
	scaffold_controller	
create	app/controllers/users_controller.rb	
	erb	
create	app/views/users	
create	app/views/users/index.html.erb	
create	app/views/users/edit.html.erb	

## Userをdeviseで認証に用いる

### ログインするユーザとして、deviseを生成します。 rails generate devise user

[WebDB@cisnote vegetable-market]\$ rails generate devise user Running via Spring preloader in process 4450 invoke active\_record create db/migrate/20161012094340\_add\_devise\_to\_users.rb insert app/models/user.rb route devise\_for :users [WebDB@cisnote vegetable-market]\$

## deviseのmigrationを探す

### ユーザが自分を登録した際に、自己登録が可能なユ ーザは全て「一般ユーザ」のroleを持つように,デフ ォルトを設定します。 db/migrate/2016....add\_devise\_to\_users.rb

というファイルを探します。



## deviseのmigrationを修正

Userテーブルでscaffoldした際に生成した、emailの フィールドを、deviseでも生成しています。 ここを、コメントアウトします。 5行目付近の

# t.string :email, null: false, default: ""



## Userのmigrationのroleを修正

新たにユーザが追加された際に、デフォルトで「一般」になるように、以下のように修正します。

ここで、私は3としていますが、rolesで「一般」として表示された ID番号が3だったので3にしています。

Emailには, null: falseを追記します。

皆さんの画面では、違う数字になる可能性もあります。



## Migrationの実行

### usersテーブルを作成しておきます。

### (deviseのmigrationで、emailをコメントアウトしない と、エラーになります。)

### rake db:migrate

## これから行うこと

(1) rolesのトップ画面でユーザ認証を要求します。

(2) ユーザとして、adminを登録します。

- (3) userテーブルを編集して、adminユーザの権限を admin(管理人)に設定します。
- (4) rolesマスタの編集権限を、adminだけに限定します。

## ホーム画面の設定

merchandisesのindex画面を、このショッピングサ イト・システムのホームとして設定・登録してみます。 (今後、段階的に書き改めます。) config/routes.rbに、以下の記述を追加します。 get 'merchandises', :to => 'merchandises#index', :as => :user\_root resources :merchandisesの前に書きます。



### 私の場合には、以下のようになります。



### config/routes.rb

### devise\_for :users

自動的に生成されているはずですが、なかった場合は自分で書き加えて下さい。これによってdevise規定の「ログイン」画面や、ユーザ登録画面が自動的に組み込まれます。

get 'merchandises', :to => 'merchandises#index', :as => :user\_root

□ この行の記述が、ログイン後の画面(ユーザルート) になります。

### welcome\_controller.rb

ログイン済みの場合には、welcome#indexではな く、:user root (merchandises#index)が表示 されるように、切り換えます。 App/controllers/welcome\_controller.rb のindex メソッドに以下の内容を追加します。 if current user redirect to :user root return end

### welcome\_controller.rb



### current\_userについて

このパラメータが設定されているときは、login済みだ と判断できます。

Userをdeviseしたので、current\_userとなります。 authenticate\_user!も同様です。

もし、memberをdeviseしたなら、 current\_memberというパラメータが生成され、認 証の実行は authenticate\_member! になります。



### 認証を要求したいControllersに、認証の要求を書き 加えます。(今回は、roles\_controller.rb) before filter : authenticate user!



## Adminユーザの登録

http://127.0.0.1:3000/roles を開こうとすると、認証画面に飛びます。 最初に、一般ユーザと同様の手順で

admin

を登録します。ログイン画面から、 sign\_upするとユーザ登録に 移ります。

0	
VegetableMarket	× ₽
<ul> <li>127.0.0.1:3000/L</li> </ul>	users/sign_in

You need to sign in or sign up before continuing.

Log in
Email
Password
Remember me
Log in
<u>Sign up</u>

Forgot your password?



### adminとするユーザを、普通に登録します。 この段階では、adminのHandleは出てきません。

VegetableMarket × 문
( i)   127.0.0.1:3000/users/sign_up
Sign up
Email
hogeadmin@hosei.ac.jp
Password
(6 characters minimum)
•••••
Password confirmation
••••••
Sign up
Log in

## Usersテーブルで編集します。

### http://127.0.0.1:3000/users

を開くと、sign upしたユーザのhandleやroleを編集 できます。

ここで、roleを1(admin)に、handleを1に設定します。 このユーザは、今後adminになります。





Usersコントローラを修正し、 sign upしたユーザが、自分の「設定情報 (Handle)」を編集できるようにします。 Roleの変更は、adminだけができるようにします。 (一般ユーザが、勝手にroleを変更すると困る。)

現状では、一般ユーザが他のユーザのハンドル名も編集できます。これはなんとかしないとなりません。

## Model role.rbとuser.rbの修正

### ここで、roleとusersの間に、relationを貼ります。 user.rbでは belongs\_to :role role.rbでは has\_many :users



## RoleをDrop Down Listにする

app/views/users/\_form.html.erb を編集します。

<%= f.number\_field :role\_id %>

♦ ①   127.0.0.1:3000/users/2/edit
Editing User
Email
hogeadmin@hosei.ac.jp
Role 管理人  ◆
Handle
Admin
Update User
Show Back

<%= f.select :role\_id, Role.all.collect{ |c| [c.jname, c.id]} %> に修正します。

```
<div class="field">
40
       <%= f.label :email %>
5
       <%= f.text field :email %>
6
7
     </div>
8
9⊝
     <div class="field">
      <%= f.label :role_id %>
0
      <%= f.number field :role id %>
1
     </div>
2
3
40
     <div class="field">
       <%= f.label :handle %>
5
       <%= f.text field :handle %>
6
     </div>
```

を

15	<%= f.label <mark>:email</mark> %>
16	<%= f.text field :email %>
17	
18	
19⊝	<div class="field"></div>
20	<%= f.label :role_id %>
21	<%= f.select : <b>role_id</b> , Role.all.collect{
22	
23	
24⊝	<div class="field"></div>
25	<%= f.label :handle %>

## パスワードの編集は別!

パスワードは、 http://127.0.0.1:3000/users/edit を起動することで編集できます。

app/views/devise/registrations/edit.html.erb の編集が反映されています。

## Sign outの追加

現在、まだSign outの処理が入っていません。

画面はあまり調っていませんが、roles のindexにSign outを 加えます。

<%= link\_to('Sign out', destroy\_user\_session\_path, :method => :delete) %>









http://127.0.0.1:3000/

- にアクセスします。Sign in していない場合には、Welcome画 面が表示されることを確認して下さい。Sign in してこのURL にアクセスすると、user\_root(merchandises)が開きます。
- Login認証の要求を、http://127.0.0.1:3000/rolesを開い て確認して下さい。
- ここで、自己登録することで一般ユーザとしてログインできること を確認し、ログイン後にuser\_root画面が表示されることを確 認して下さい。

また、sign outでログイン前の状態に戻ることを確認して下さい。 この画面の確認ができて、今日の課題は完了です。

うまくいったらバックアップ

今回、あれこれフォルダも生成しました。それらのすべ てをバックアップ対象にするために、

git add –A

とコマンド入力します。

バックアップ対象を、保存します。名称は、'ログイン認 証まで'とつけました。

git commit -m `ログイン認証まで'

## 欠席課題

本日分の欠席課題は、ログイン認証の報告です。

 ログイン認証を要求しているデータベースの(私の サンプルでは、roles)テーブルで、「認証要求を行っている」コントローラ記述の部分を、ソースコードを 引用して記載し、その結果、一覧を表示しようとした 際にログイン認証が要求されている部分のスクリー ンショットと、ログイン後に一覧の表示ができている 部分のスクリーンショットを添付して下さい。
 この結果の報告で、出席扱いに切り換えます。

#### 次回、 TDDを 導入します。

バックアップの方法を学び、システムの基本設計を考 えてきました。

次は、テスト駆動開発の考え方を学び、システムの TOP画面からの開発を、テストを導入しながら検証 していって進めるやり方で学びます。

今回のroleの追加を踏まえて進めて行きます。